

『続古事談』写本（フェリス女学院大学附属図書館蔵）の 翻刻と国語学的私注（2）

勝 田 耕 起

はじめに

本稿は同名論文（1）『玉藻』五五号、二〇二一年三月）の続きである。翻刻においては、原文行間の挿入注記を本文の挿入位置に（へ）、訂正（置換）注記を当該文字列の下に「」を挿入して表示する。参考文献の追加分は文末に記した。凡例の追加分は以下の通りである。

・今昔物語集の鈴鹿本を漢字表記の判断材料の一つとする。

・『注解』（神宮文庫蔵片仮名本底本Ⅱ神本）の対校本とその略称は、東洋文庫蔵岩崎文庫本Ⅱ岩本、小浜市立図書館蔵伴信友本Ⅱ伴本、上賀茂神社蔵三手文庫蔵Ⅱ賀本、群書類従本Ⅱ群類本とする。フェリス本はF本とする。新大系の名古屋大学小林文庫本Ⅱ小林本とする（小林文庫にある三種類の続古事談のうち、

請求番号9—20—3のもの）。日葡辞書Ⅱ日葡。

・枕草子は新大系の本文・章段番号に拠る。

・漢語については漢字音—呉音と漢音—を記すことがあるが、これはさしあたり『全訳漢辞海第四版』（三省堂、二〇一七）によった。同書は「江戸期以後の推定や演繹による読みを退け、鎌倉・室町以前の古辞書などにのこる字音資料にもとづく」ことを明記しており（七頁）、これまでの訓点資料、日本漢字研究の成果の反映が期待できるものである（一六八八—一六九〇頁）。字音については二〇二一年五月の日本語学会でも「字音仮名遣いの検証と発展的問題」として問題点が掲げられており、個別の具体的研究、説については確認し得たものから追記していくこととする。

・『韻鏡』は韻と略す。『韻鏡校注』（龍宇純著、藝文印書館、一

九七四)を参照し、推定音価は平山久雄「中古漢語の音韻」(『中國文化叢書1言語』大修館書店、一九六七)によった。広韻は鈴木慎吾「Web韻圖」(URLは「参考文献」に記す)を介して国会図書館蔵刊本(解説には「本版は、南宋の孝宗朝(一一二五-一一三六)初期の刊本を寧宗朝(一一九四-一二二四)の頃に覆刻した杭州刊本とみられる」とある)を参照した。

【翻刻】

- (3) 東宮*の御まもりに*壺切*といふ太刀*は、昭宣公*の太刀なり。延喜の御門、儲君*におはしましけるに奉られ*たりけるより伝はりて、代々*の御まもりとなるなり。後三条院*東宮に立*給時、後冷泉院より渡され*さりけり。後冷泉院うせ給て後*、求め出て*、大一条殿*関白*の時、後三条院に奉られにけり。「立力」坊*の時(後力)廿余年*渡されてやみにき*。今、位につきて後、とゝめられすともありなん*」と世の人申けり。三条院おほせられける、「神璽寒[宝]剣、要なり*しかとも、廿余年すきにき。なにかくるしからん*」とて、とゝまりにけり。其後*ほとなく二条内裏の火事*に焼けにけり。身*はかり残りたりけるに、柄鞘をつくりて具せられ*たるなり。

【注釈】

○東宮 [色]「東宮トウクウ」(卜官職)。黒川本は「東宮」の左に小字で「春宮同」と前田本に無い書き込みがある。十卷本字類抄「東宮職」「春宮坊」(卜官職、訓は無し)。令集解・東宮職員「六云。御子宮。在御所東。故云東宮也。伴云。四時氣自東発。即春准此故。為東宮、春宮。」とあるように「春宮」は意味(連想)による当て字(「春」の字音は呉音漢音とも「シュン」)。「宮」は漢音キウ、呉音ク・クウ・グウ。文明本節用集「東宮(トウグウ)」(卜官位)、日ボ「Togu」。詩経「衛侯之妻、東宮之妹」(衛風・碩人)にある漢語。「東」は韻第1転一等で韻尾はり、「宮」は韻第1転牙音全清三等 *kyōng* なので鼻音り+無声子音 *k* となり連濁しやすい環境である。連濁・古代的清濁とその研究史は高山倫明「連濁と連声濁」(『訓点語と訓点資料』八八、一九九二)に詳しい。前の文に「全清:なので:無声子音 *k*」と記したが、高山論文では「中古漢語の」清・濁が(こえ)の有無だけで対立していたかどうか、なお検討の余地はあろう」と注意されている。古代語の字音の連濁については以下のような論考がある。

奥村三雄「字音の連濁について」『国語国文』二二の五、一九五二
小林芳規「院政・鎌倉時代における字音の連濁について」

『広島大学文学部紀要』二九の一、一九七〇

沼本克明「漢音の連濁」

『国語国文』四二の一、一九七三

中川芳雄「連濁涵精（下）」

『国語国文』四七の三、一九七八

浅田健太郎「日本語における半濁音化をめぐる問題…声明資料

を手掛かりとして」『鎌倉時代語研究二十三輯』二〇〇〇年

○（御まもり）に（つほきりといふ太刀）新大系底本は「御まも

りつほきりといふ太刀」と「に」が無かったらしいが、諸本によ

り補ったと脚注にある。『古典文法総覧』（三七九頁）が、「の」の

意である、と指摘する次の①②の「に」が類例ということにな

ろう。

①平家物語「ひかへひかへ落ち給ふを、猪俣党に岡部の六野太

忠純、大將軍と目をかけ、鞭鐙をあはせて追ッ付き奉り」（巻

九・忠度最期）。

右は新編全集（高野本）だが旧大系も同じ。長門本の対応箇所

には無いが、その少し前の「盛俊最後」のところに「猪俣党に人見

四郎といふ者、（中略）浜の方より出来たり」とある。

②承久記「平義時といふ人あり。上野介直方に五代の孫、北条

遠江守時政が二男なり。」

これは慶長古活字本（新大系三七四頁下段）で、慈光寺本（新大

系三〇四頁あたり）には無い。慈光寺本は鎌倉時代のものと言わ

れている。

○つほきり『国史大辞典』によれば「藤原氏が自氏出身の皇太子

の地位を安定させるため、皇位のしるしの神剣に倣って設けたも

のであろう。『西宮記』によれば、延喜四年（九〇四）醍醐天皇は

保明親王を皇太子に立てる際、わが立太子のはじめ、父宇多天皇

からこの剣を賜わったので、今これを皇太子に賜うと仰せられた、

という。これが事実なら醍醐天皇立太子の寛平五年（八九三）創

設されたことになる。代々の皇太子のうち小一条院には道長が妨

げて献らなかつたという。『壺切太刀』（黛弘道）。生井真理子「壺

切伝承考…『江談抄』と『続古事談』から」『同志社国文学』五六、

二〇〇二。

○太刀色「大刀タチ似劔而一刃曰刀 劔 同俗用之」（タ雑物、

黒川本）、十巻本「太刀タチ」（タ雑物）。日国語誌「（3）平安時

代以降、反刀が用いられるようになるとともに、「たち」は「大刀」

から「太刀」と書かれるようになり、さらに近世以降は、刃を上

にして帯にさす打刀が流布し、その二腰を大刀・小刀と称したの

で、それとの混同を防ぐため、「たち」は太刀と書くのが慣例に

なった。（4）なお、今日では、古墳時代以後、奈良時代までの直

刀を「大刀」、平安以降の反刀を「太刀」と書いて区別している。

なお、タチの語源は「断ち」と結び付けられることが多いが、武

井睦雄「ツルギ」と「タチ」——古代刀剣名義考——『築島裕博士

傘寿記念国語学論集』(汲古書院、二〇〇五)は奈良時代以前の刀剣の形状と機能から「これを「断ち」とする解釈の成り立つ蓋然性はきわめて低い」とする。

○昭宣公 せうせんこう。藤原基経(八三六〜八九一)の諡号。

○儲君 [色]「儲君 帝王部 チョクン 踐祚分」(チ疊字、黒川本は左傍にマフケノキミと書き込みあり)、源氏物語・桐壺「うたがひなきまうけの君と、世にもてかしづき聞こゆれど」。日国は「もうけのきみ」は「儲君(ちよくん)」の訓読み」と注する。漢籍では『春秋公羊伝』『後漢書』に例がある。[観]「儲マウクタクハフソナフ」(仏上二七)

○たてまつら(れ) [色]「奉タテマツル供貢進(以下九字略)已上同(タ辞字・黒川本)

○代々 [色]「代々タイタイ」(タ重点・黒川本)、「世々ヨヨ 代々EIEI」(E重点)、日ボ「Daidaini ッタワル」。

○後三条院 一〇三四〜一〇七三。皇太子期間二四年、在位四年半。後冷泉院(一〇二五〜一〇六八)は兄。

○立(つ) ある立場に身を置くこと。古今集・仮名序「人丸は赤人が上^{かみ}にたたむ事かたく」、大和物語・五「后にたち給ふ日」。

○わたさ(れ) [色]「度ワタル渡過(中略)涉亘又ワタスー橋(以下二七字略)已上度也」(ワ辞字)。十卷本「涉ワタル」「渡」

「度」「亘」橋等也」(「済已上同」(ワ辞字)のように、自動詞形ワタルに対し、ワタスの出方が曖昧。観智院本名義抄でも「淫ススクワタル」「右下傍ス」、「済ワタル」「右下傍ス」スクフ(後略)「法上五」、「化ヲシフメクムウツクシフヲモフク(中略)ユクワタル」「右傍ス」カハル(後略)「(仏上三二)」、の三種類の字にしか和訓が付いていない(ワタルは五十種類以上)。訓点資料に見られる漢字は「度」「過」「跨」など。今昔には全訓捨てがなの「守^リ渡^ワ」(巻五の三、鈴鹿本)がある。

○(うせ給て) 後 接続助詞テの直後に名詞ノチが付いている形。古今集「身まかりてのち、人も住まずなりにける」(八五三詞書)。古事記・下・允恭天皇「率寝てむ後は(人は離ゆとも)」(韋泥互牟能知波)のように完了+推量の連体形が「のち」に懸かる例もあった。古今集の「まかりて」と「のち」の離れ具合はよくわからないが、単独で副詞的に用いられていたもの(…て、のち、…)が慣用表現になったものか。『日本文法大辞典』(松村明編、明治書院一九七一)「て」(接続助詞、西田直敏執筆)の項目は【「て」の下への接続】として特殊な例を三種に分ける。その③が「体言『後』につづける」であり、『源氏』の挙例がある。①は「て侍り」「て候」、②は「てこそ」「てスラ」「生まれてヨリこのかた」(中華若木詩抄)などで、やはり③の説明は難しい。

○もとめて「求め出づ」で源氏物語などに例がある。探し出す。

意。一方「求めイタス」は法華百座聞書抄、今鏡など院政期から。

〔色〕「求モトム（以下二五字略）已上求也」（毛辞字）。関一雄「複合動詞変遷上の一問題——他動詞＋出づ」から「他動詞＋出だす」へ。『言語と文芸』一の一四、一九五九。

○大二条殿 藤原教通（九九六～一〇七五）の号。国史大辞典「後冷泉天皇の死により後三条天皇が踐祚。〔中略〕藤原氏に対する反感が強く、摂関家を抑えて積極的に親政を行なった。このため関白教通の実権は低下していった。『続古事談』には、藤原氏の氏寺である興福寺南円堂の造営を、大和国司の重任成功によって行おうとしたところ、天皇が強く反対したため、教通が藤原氏の公卿を朝議の場から退出させた話がみえる。」↓33話

○関白 〔色〕関白 クワンハク（ク官職・黒川本、十卷本は「関白」（ク官職）とあるが、訓がない。二卷本には無し。節用集は伊京集「関白クワンバク」（ク人倫）〓明応五年本、天正一八年本、経亮本「クハンバク」、日ボ「Qunbaqu」。関字は韻22転二等kanで鼻韻尾。連濁（連声濁）しやすい環境だが、そもそも「白」（呉音ビヤク、漢音ハク）は韻33転唇音全濁二等（〓「膨」と頭子音・主母音が同じ）の入声であり、推定中古音はbəkだから、中国から「関白」という漢語を輸入した時点で「クワンバク」だった

たと考えられる。日本の役職名のもとになったと言われているのは漢書・霍光伝の例「諸事皆先、関白光」。然後、秦御天子（あずかりもうす意）。【参考】「白」が後部要素になる熟語としては次のようなものがある。①「寸白」。〔色〕「寸白スハク」（ス人体・声点なし）。大和宮家文書・建久一〇年（一一九九）二月一二日・某讓状（鎌倉遺文二・一〇三七）「すんはくのたいしにて、あさましく候へは、よるなとしめることもそ候」、明応五年本節用集「寸白スンバク腹中惡虫」（ス畜類）、日ボ「スバク。Sumbacu」という方がまさる。『医心方』には「病源論云、寸白者、九虫内之一虫是也」（七・九八四年）とあり、巢元方『諸病源候論』（六一〇年）からの引用文中に「寸白」があるが、宋代の歐陽修（一〇七〇～一〇七二）の詩『病中代書奉寄聖俞二十五兄』にも「九蟲寸白爭為孽」とあり、「関白」と同じように漢語起源であることは確実。②「明白」。〔色〕「明白メイハク」（メ聲字・黒川本。『老子』にある漢語。「明」は韻33転唇音清濁三等manで鼻音韻尾。ロザリオの経（高羽五郎『国語学資料』一九五四年による）には「与へ給ふといふ」と明白（meifacu）也」（附8）と「叶うたるといふ」と明白（meifacu）也」（卷2第4）の清濁両様がある。黒本本節用集「明白メイバク」（メ言語）。③黒白。〔色〕「黒白」（コ聲字、声点なし、和訓なし）。韓非子に「欲知黒白之情」（卷四・

姦劫弑臣第十四」とある。易林本節用集「黒白コクビヤク」（コ言辭）、梁塵秘抄口伝集・一〇「ちかごとをたてて皆教へて候しぞ。このこくはくは、如何にしてか知り候らん」とあるが、コクバクと濁音表示した実例は未見。その他、字音語の後部要素となる「ハク」の連濁例として日ボ辞書に「campacu（寒薄）」と半濁音の例がある。同じく日ボには「Quinacu（金箔）」、「Guinaku（銀箔）」とあり、これは現代語の連濁と異なる。

○坊「春宮坊」（東宮に関する事務を取扱う役所）の意から転じて、東宮（皇太子）をいう。性霊集・四・春宮献筆啓「狸毛筆坊献」、宇津保物語・国譲下「同じ日ばうをすゑずなりぬれば、今はしにくかりぬべき事」、源氏物語・桐壺「この御子生まれ給て後は〈略〉坊にも、ようせずはこの御子のみ給べきなめりと」。書人にある「立坊（りふばう）」は立太子のことで愚管抄に例があり、続古事談にあつてもおかしくはない。F本「坊の時」は傍書まで『注解』の小林本と同じ。異同の多い箇所では、『注解』によれば、岩本「立坊の時（傍書「後敷」）」、賀本「立坊の後（傍書「時」）」、伴本「立坊の後」。本文が「坊の時」ならば「皇太子であつた期間の二十数年、宝剣は渡されずに」という意味になり、「立坊の後」なら「立太子以来二十数年、」となる。原文「立坊の後」から「後」字に訂正が入る過程は考えにくく、「坊の時」が古態なのではないか

と考えられる。『注解』は逆に、「坊の時」は「やや熟さない表現で類例は未見」として「立坊の後」を採っている。「世の人申しけり」の内容（会話文）は、全体がケリ基調の文章なので、「やみにき。」で終わる文の文頭からと考えた。

○廿余年 古本説話集「としは五十よになりぬるに」（二八）

○わたされてやみにき「渡されで」と打ち消しに解釈し、渡されないでそのままになった意。ヤムは基本的に「雨やまず」（土佐日記）のように起こった現象や事態の終了を意味するが、ここでは想定された事態が結局おこらないままになる、という意味。類例として更級日記「京にとどめて、ながき別れにてやみぬべきなり」がある。これは、六〇歳で東国への任官が決まり、二五歳の娘と一緒に連れて行つても自分が死んだ後たいへんだろうから、京に置いていくべきか、とあれこれ悩んだ末の父親孝標の言葉。

○すともありなん「くずともありなむ」の形で「くしなくてもいられる」、「くしなくてもいいだろう」の意。蜻蛉日記「わざわがしう構え給はずともありなむ」（天禄元年）、枕草子・六〇「元結かためずもありなん」、徒然草・一三九「植ゑずともありなん」。

○えうなり かな遣いが合っているとすれば「要なり」あるいは「妖なり」。

色「要エウスエウ」（工辞字）

○くるしからん「苦し」は差支えがある意で、中世から否定・反

語表現を伴って用いられるようである。平家物語・七・忠度都落「其人ならばくるしかるまじ。いれ申せ」、宇治拾遺物語・五〇・平定文本院侍従等事「人るまじり、くるしかるまじき所にては、物いひなどはしながら」。原文は「くるしからん」と読めないこともない。「か」の下に点があるが、前後にある「ら」の形（入筆時）には点が見られない。

○其後 源氏・末摘花「そのちこなたかなたより文などやり給ふべし」。「そのゴ」を日国は立項するが、用例は二葉亭四迷『浮雲』。ヘボン三版でも「ソノゴ」は無く「ソノノチ」のみ。

○火事 蜻蛉日記・天禄三年「宵うちすぎてののしる。ひのことなりけり。」今鏡・二・手向「大極殿、先の帝の御時、ひのこと侍りし後」、殿暦・承德元年（一〇九七）二月二日「子剋許有火事」、文明本節用集「火事クワジ」（ケ態芸。運歩色葉集「火事クワジ」「火事ヒゴト」、色葉字類抄、十巻本にはクワジ、ヒノコトともに無し。

○み 刀身をいう。平家物語・四・信連「衛府の太刀なれども、身をば心得て作らせたるを」

○くせられ 色「具クス」（ク辞字・黒川本）。〈AニBヲ具ス〉の形になる他動詞。物を添え加える意。竹取物語「かのたてまつる不死の薬（A）に又壺（B）ぐして御使にたまはす」。この箇所、『注

解』の神本はF本と同じだが、岩本、賀本、伴本は「くせられ」ではなく「進られ」で、シンゼラレ、あるいはタテマツラレと訓んだものと考えられる（右の注記「たてまつられ」に「進」字があること参照）。新大系の注（六四六頁三六）には、小林本「進せ…」とあつたのを勸本（宮内庁書陵部蔵）他により「くせ…」に改めたとある。また、「進」字の草体が平仮名「くせ」に似るという指摘がある。F本3話の「くせられ」と162話の「進」字画像（昇進）とを比べてみよう（【図】）。

①平仮名「くせ」↓「進」草体に解釈

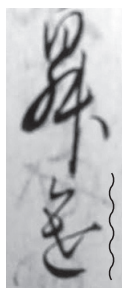
②「進」草体↓平仮名「くせ」と解釈

という二つの方向性を考えるとき、図のように仮名の字母・形はありふれたもので、これをわざわざ漢字に解釈するという①は考えにくいのではないか。F本の未然形「グセ」は他に76話、184話

【図】



（くせられ）



（昇進）

にあるが、いずれも「くせ」「くせ（改行で連続しない）」で「進」との異同はなし。

【翻刻】

(4) 造酒司（つくりし）の「大刀自（おほはし）」といふ壺（つぼ）は三十石（さんじやく）*入（い）*なり。土に深く掘り居（ほ）へて*僅（わ）かに*二尺（ふたしやく）はかり出（い）てたるに、一条院の御時、ゆへなく地より抜け出（ぬ）て傍（かたはら）に*ふし*たりけり。人驚（おどろ）き怪（あや）しみ*ける程（ほど）に、御門うせ給にけり。三条院御時、大風（おほいかぜ）ふきて、かの司（つかさ）たうれ*にけるに「大刀自（おほはし）」「小刀自（こはし）」「次申自（つぎまうじ）」みなうち破（やぶ）り*てけり。

【注釈】

○造酒司 [色]「造酒司サケツカヒ」（サ官職）とあるが、二巻本は「サケツカサ」とあるので、三巻本の「ヒ」はこの語の語頭でも使われている片仮名「サ」の異体Ⅱ「七」の誤写だろう。十巻本「造酒司」（サ官職）に和訓は無いが、少なくとも「ミキノツカサ」という読みは排除していいと思われる。元和本和名抄「司職員令云〈中略〉造酒司〈佐希乃司〉」（巻五・職官部・官名）
○つは [色]「壺ツホ」（ツ雑物・黒川本）、[観]「柑ツポ」（法中六二）。上代万葉仮名の例は「都保（つほ）」「都符（つふ）」で二拍目は清音。

○三十石 [色]「斛（はく）コク十斗為（し）一石同」（コ員数）。斛（はく）は漢音、石（は）は慣用音。「十（ジフ）」は院政期には無声子音の前で促音化し、サンジツコクと発音したとみる。沼本克明「日本漢字音における唇内入声字の促音化とフ入声」『国語学』九九号（一九七四）参照。永禄二年本節用集に「十哲ジツテツ」「十徳シツトク」、天草ヘイケに「sanjicu（三十騎・サンジツキ）」「nisanjisso（三十艘・ニサンジッソウ）」「gojitan（五十反・ゴジタン）」「sanjūnin（三十人・サンジフニン）」「nijūman（二十万・ニジフマン）」とある。一石は約一八〇リットル。日ボ「ichicou（イチコク）（訳 マス（一升）の百倍分をもととした数え方。穀類、酒、塩などを計るのにいう）」。

○入 本話が引用されている『壺囊抄』には「小トシハ廿石入リ」（巻二の二四、正保三年版本）と送り仮名がある。後世のものが仮名書き例として、説経苅萱（かりかや）（一六三二）中「三斗三升いり」のけに、みつをいれただいて」（『説経節正本集 第二』大岡山書店、一九三七より）もある。

○ほりすへて [色]「堀ホル堀疏：穿：已上同」（ホ辞字）、「居スフ 爰安坐處」（ス人事）。万葉集・三・三七九「齋瓮（いはひへ）を忌ひ穿居（ほりすゑ）」（ほりすゑ）、壺囊抄は「堀居（ほ）テ、打聞集「箱ヲ掘入ツ」（二六話）。スエルに「掘」字を使うようになったのは新しい。書言字

考節用集「居スル」(言辞・ス)。

○わつかに 色「僅ワツカ(以下一九字略)已上同」(ワ辞字)

○かたはらに 色「側カタハラ傍(以下八字略)已上同」(カ方角)。今昔は「側」より「傍」が多い。塙囊抄は「拔出テ傍^{ワツ}二覆シ

テ、『言談抄』類話は「ぬけいて、かたふきふせり」(三九話)。

○ふし 二卷本字類抄に「伏フス仆(以下二〇字略)已上同伏也」

(フ人事)とある。黒川本は「臥伏仆(以下二〇字略)已上臥也」

(フ人事)とあつて和訓が抜けている。今昔はほとんど「臥」。日国には「横になる、倒れる」という語釈があるが、人ではなく物が主語の例は他にあるだろうか。酒壺自体が神のような扱いで、かつひとりで動いたという話であるから、他に例がなければ擬人法ということになる。

○おとろき 色「驚オトロク駭愕(以下二二字略)已上同」(オ辞字、黒川本)

○あやしみ 字類抄は三卷本、十卷本ともアヤシム(フ)を載せず、形容詞アヤシのみで、掲出順は「奇」「怪」。言談抄は仮名書き。今昔のアヤシムはほとんど「怪(怪)」、少数「奇」。観「異コトニ(ナリ)アヤシムタスクウヤマフホシマ、」(仏中一一)、「金剛波若經集驗記」平安初期点(八五〇頃)「其僧等見此事稍異」の「異」字の紙背に「アヤシム」とある(天理本(黒板勝美田蔵本)

二卷9枚目)。日国語誌「あやしむ」とともに平安時代初期から使用されているが、院政期頃を境に「あやしむ」が多用されるようになった。平安時代にはおもに漢文訓読系の文献で用いられている。(後略)。

○大風 和名抄・一「大風漢書云大風吹兮雲飛揚(大風世間云於保加世)」、古本説話集・二八「二年のおほ風に倒れ候ひにき」。

○たうれ 色「倒タフルタフス(以下二五字略)」(タ辞字、黒川本)。歴史的仮名遣い「たふる」。言談抄は「大風に土間屋顛倒の時、破損しにけり」とあり、「司^{つかさど}たうれにける」とする続古事談より理解しやすい。『注解』も「(の建物)が倒壊して」と補って訳している。言談抄の「土間屋」の用例は他に未見だが、酒壺が埋まっているのは土間であり、それを風雨から守るための柱、屋根、壁などの建造物が「屋」だろう。

ところで、塙囊抄にも「タウレケルニ」とあるが、タフル、アフグなどは一般的にハ行転呼音の例外であり、「[tauru]」からの「[tauru]」という母音連続(au)が回避されて口頭ではタフル「[aworu]」となったと説明される(日ボ[aururu])。「言ふ」は発音通りに「言う」と表記されるようになるが、タフルと発音している「たふる」を「たうる」と記す理由はない(タフレという発音から推定される表記は「たをれ」「たおれ」「たほれ」、歴史的仮名

遣いの知識で「たふれ」、の四種で「たうれ」にはならない。しかし実際は、鎌倉初期までの加点とみられる高山寺藏消息文範に「倒（タウレ）」とある（築島一九六三・五五八頁による）し、古本説話集写本でも「たふる」4例、「たうる」3例と拮抗しており、鎌倉時代の表記として珍しくないのである。このことについて出雲朝子「仰ぐ」「倒る」等の語形について（『馬淵和夫博士退官記念国語学論集』大修館書店、一九八二）は、鎌倉時代の「相違」という語にサウイーサオイの両形が見えること、同時代にアウグーアオグ、カウボルーカオボル（蒙）等の対立の例が見え、これは $au \rightarrow ao \rightarrow o$ という開長音化の過程における語形のゆれを表している」と解釈している。つまり統古事談の「タウル」は、伝本の新しさによる表記の乱れではなく、（一四世紀後半に）「タオル」に安定する前の、「 au 」や語幹末尾が長音化した「 oi 」のような、不安定で結果的に避けられた語形を表している可能性があるのである。

○次申自 まず本文については『統古事談』には異同が多いものの、先行する『延喜式』『言談抄』の記述から、大く、小く、次くという三種の壺が造酒司に存したことは認めてよいと思われる。

・延喜式卷四十に「造酒司・祭神九座（中略）三座 從五位上大
 邑刀自、從五位下 小邑刀自、次邑刀自」とあり、虎尾（二〇

一七）によれば貞享本を除く全写本に、次のような脚注がある。同書下巻九〇三頁の校異補注を参考に神名の万葉仮名をカタカナにして形態素の切れ目を入れて示すと、「古老口伝、オホ・タウメ、コ・タウメ、スキノ・タウメ止云、就字案之、オホイ・オフ・トシ、スナイ・オフ・トシ、スキノ・オフ・トシ止可読歟」となる。「大」や「小」ですら訓みの検討は必要である。スナイは官職名にだけ現れる特殊な形で、和名抄・五「少納言 職員令云少納言（須奈伊毛乃万宇之）」「少辨職員令云左右少辨（須奈伊於保止毛比）」等がある。オフは「邑」の呉音。

・言談抄「造酒司の納殿には大刀自・小刀自・次刀自あり」（三九話）

よつて、F本（ほか最低でも十二種の）テキストを尊重して「次」を副詞に訓み、「申」を動詞に訓む可能性についての検討はあまり重要でなく、異同は伝本の系統を考える材料となる程度だろう。大小の壺に関しては仮名書きで「とし」とあるので、ここも「次刀自」と考え、あとは「次」字をどう読むべきかが問題となる。候補としては（一）スキ「ノ」、（二）ナミ、（三）ツギ、が考えられる。

（一）スキ（ノ）トジの可能性 まずは延喜式の「次刀自」に対し

て注せられている「スキ」という訓を検討しよう。「次」字をスキと訓んだ例として色「次飯スキイヒ」(ス飲食)がある。延喜式・三五・大炊寮「中宮雜給 日別(に) 米四斗平飯料・六升磨飯料(略) 女藏人 日(に) 米一斗三升・上飯二斗料、御膳宿采女 日米五升・次飯一斗料」は、給与として支給される米または調理済みの飯を示したものである。女藏人と采女とでは女藏人が上位であり、上飯・次飯はグレードの違いと考えられよう。それが具体的にどのようなものかについては、『日国』は「次飯」を「未詳。干し飯の類か。」とし、相習貴志「百度食と熟食」『延喜式研究』二三(二〇〇七)は「米の状態に応じて炊く際の水の分量が異なつた(中略)炊きあがつた状態もそれぞれかなり異なつていたと想像される」とし明らかでないが、波線部の「平飯」「磨飯」は精白度の違いと推定されており、精白度の低い「平飯」の支給形態として「上飯」と「次飯」という優劣のある二種がとらえられれば十分である。スキとは、そもそも大嘗祭で用いられる新穀、酒料を献ずるため占いで選ばれた国郡の二位のことで一位をユキという。日本書紀・天武五年九月「新嘗の為に国郡をトはしむ。斎忌(斎忌、此云踰既)」は則ち尾張国の山田郡、次(次、此云須岐一也)は丹波国の訶沙郡、並びにトに食へり。続日本紀・天平神護元年(七六五) 十一月三日・宣命「由紀・須伎二国ノ献レル

黒紀・白紀ノ御酒ヲ」。造酒司の大壺と小壺の中身の材料が飯にユキ田産物の物ならば、スキ田の米で作る次の壺「スキ刀自」はありうるのではないか。酒壺と材料たる米とを結びつけるのは合理性のみの想像に過ぎないが、院政期に「スキイヒ(次飯)」という単語が存したことは確実なのである。

(2) ナミトジの可能性 観「次ツキツイテ(中略)ナミ(中略)ツグ」(法上四六)。一七七五年の『物類称呼』一卷に「東雅」二、むかし酒造司に大刀自(を)とじ 小刀自(ことじ) 次刀自(なみとじ)とて三ツの酒造る壺有ける。其大刀自は酒三石ばかり入し物也。後に酒つくる人をも刀自(とじ)といひしは古よりいひつぎし言葉なるか。彼酒造司の刀自は三条院の御時、大風に司たふれし時に、自うちわりてけりと古きものにするし置けり。是等の事の如きも世には異国のことなど附会していふ説ありと見えたり、と有(一)国立国語研究所「日本語史研究資料」<https://gblol.nijjal.ac.jp/nijjal/>で版本の「フリガナ」が確認できる)とある。江戸後期のものだが、語形の確例ではある。形容動詞「ナミ(並なり)」は、普通で、特に秀でるわけでもない意で現代でも使う。万葉集・五・八五八「若鮎釣る松浦の川の川波の奈美にし思はばわれ恋ひめやも(大伴旅人)」。中世以降に「次」をナミと訓んだ例として、節用集「次居ナミイル」(ナ言語、饅頭屋本・経亮本、

『塵芥』（清原宣賢）「月次ツキナミ」（ツ時節）などがある。

(3) ツギトジの可能性 形容動詞「つぎなり」は「あるもののすぐ下の地位、少し劣る」意で、源氏物語・若菜下「物の調べ、曲の物どもはしも、げに律をばつぎのものにしたるは、さもあかりし」、大毗盧遮那成仏経疏永保点（一〇八二年）「是れ其の亜（ツギ）の者なり」（巻五、『高山寺古訓点資料第三』訓下し文による）といった例がある。「つぎさま」（一段と劣ること・人。二流。下層）という語もある。平家物語・七・福原落「大臣殿以下妻子を具せられけれ共、つぎさまの人共はさのみひきしろふに及ばねば」、徒然草・五六「つぎさまの人は、あからさまに立ち出でても、今日ありつる事として、息もつぎあへず語り興ずるぞかし」。

○うちわり 『注解』異同なし。自動詞ワル（下二段）は中古から用例があるが、こは四段活用。色「破ワル割 礫 判已上同」（ワ辞字）。十巻本も「破、判、割」などで、「割」は掲出が無い。

【翻】

(5) 後冷泉院御時*、主殿寮*焼けゝる時、あまくたり*たる油漏器*焼けにけり。賀陽親王*是を摸し造り*たりけれとも、切用*ほとこす*事なし。それも同じく焼けにけり。大嘗会*御火おけ*、元三の御葉*温むる*鉢*なんと*

世のはしまり*の物、皆焼にけり。くすり殿*の御銚子*は破れ損し*たりけるを、雅忠典薬頭*の時、新しき銀*の*旧き*に雑せて*うち替へて*供御*にそなへけり。
(6) 典薬寮明堂図*は靈物*なり。雅康、寮御時、本寮*壊れて棄て置きて*、よろつの人見けり。かやうの累代*の宝物*、今は一ものこる物なし。

【注釈】

○御（時） 古語大鑑「おん（御）」【補説】「平安時代初期までは「おほみ」であり、その後「おほむ」以下の変化（↓オヲム↓オオム）を遂げたが、「おむ」「おん」の確実な仮名書きの例は平安時代末期に至って初めて現れる。なお、「お」は平安時代から「おまへ」「おもと」など唇音の音節の前などに用いたが、中世以後は「おん」からさらに転じて「お」を一般的に用いるようになった」。

○主殿寮 色「主殿寮トノモリレウ」（卜官職）。大鏡・師尹「と」のもりつかさの下部、朝清めつかうまつることなければ、庭の草も茂りまさり」。

○あまくたり 天上界から地上界に降下する意。源氏物語・手習「天人のあまくだれるを見たらむやうに」。字鏡集の「降」字は「クダル」のみ。

○油漏器 『扶桑略記』に「十二月廿七日、午刻、主殿寮并近辺小屋百余家焼亡。寮家之重宝、油鏝、煎御薬火爐、共為灰燼。」(巻二九・治暦二年一〇六六)とあるが「油鏝」も「油漏器」も未詳で、『注解』の『油鏝(油をこす器具)』に類するもので、金属製のものをさすか」との記述を『おうふう』も新大系も引用するのみである。本稿では「鏝」字のチリバメルという意味と、字音ロウが「漏」に通ずること、さらには行事の道具が列挙されていることに着目し、文化的なことも考慮して、「油漏器」とはある種の「鏝(さかすき)」のことであった可能性について記しておきたい。

「鏝」字は、名義抄に「鏝 音漏 キザム…チリバム…」(僧上一二八)、『左経記』に「祭日所衆車中、張施錦繡、塗鏝金銀」(万寿三年(一〇二六)四月一七日)とあるように、金銀などの裝飾をはめこむこと。呉音ル、漢音ロウ。また、油漏器の「漏」字は、名義抄に「漏 音陋 モル ウス シタル ウカツ(中略)禾口」(法上一二)とある。名義抄の音注にもあるように、『広韻』では「鏝」「漏」「陋」は同音(候韻の同じ小韻)で、『宋書』巻二七符瑞上「生禹於石紐、虎鼻口、兩耳參鏝」のような使用例から「鏝」「漏」は〈穴〉の意味で通用するという(大漢和辞典)。

続古事談より時代は下るが、『太平記』の

帝、葉を御召しありけるが、建鏝をさしおき給ひて『余りにこの水の冷たくて服せられず。例の如く加持して暖められ候へ』と仰せられければ…(巻二二、神泉苑来由事)

の例では、帝が葉を温めて飲むというほぼ同じ場面が想定されている。「建鏝」とは中国・建窯で作られた天目茶碗の一種または総称で、室町時代の『君台観左右帳記』には土物類として「曜変(建鏝ノ内ノ無上也)」「油滴(ヨウヘンノ次。是モ一段ノ重宝也。上々ハヨウヘンニモオトルベカラズ)」「建鏝(ユテキノ次)」等が列挙されている(群書類従本による)。この、後世「油滴天目」と呼ばれ、現在国宝や重要文化財に指定される茶器が、その油をちりばめたような(油が滲み出ているような)斑紋から、扶桑略記で「油鏝」、続古事談で「油漏器」と記されたのではないかと考えるのである。

「油滴」は室町時代から見える日本での呼称で、中国ではこれをキジ科の鳥の胸部の白斑になぞらえて「鷓鴣斑」といった(葉文程・林忠幹著、富田哲雄訳『建窯瓷 鑑賞と鑑定』二玄社、二〇〇四、三一―三四頁)。陶穀(九〇三―九七〇)撰『清異録』の例「閩中造鏝。花紋鷓鴣斑点試茶家珍之」(上・禽名門・錦地鷓)が文献上の最初の記事という(彭丹「国宝茶碗に見える日本文化の矛盾と相克」『日本研究』四五、二〇一二)。つまり一〇世紀の

後半には油のような斑紋の黒磁茶碗が中国で生産・珍重され、『扶桑略記』の記事以前に日宋貿易などで輸入されて帝の手に届いた可能性は小さくないと考えられる。入宋僧の成尋も日本の重要な輸入品目について「日本要用漢地、香葉・茶碗・錦・蘇芳等也」(『参天台五臺山記』四・大宋国熙寧五年(一〇七二)十月十五日条)と記している。荒川正明「日本の黒い茶碗」(『淡交 別冊』五六、二〇〇九)に「唐物天目が日本に到来されたのは、早くも平安時代後期(一二世紀後半頃)と考えられる。中世都市の博多や京都など、日本の各地の遺跡から唐物天目の出土事例が知られている」とあるのは一般的な定着の時期を述べているもので、紋様の美しい珍品が一一世紀の後半にはもたらされていたという右の推定と矛盾するものではないだろう。天目茶碗の焼成時期と日中での流通状況諸説については若田澄子『天目茶碗と日中茶文化研究』(宮帯出版社、二〇一六)参照。

以上、傍証的なものを並べたに過ぎないが、最後に、帝が元日に薬湯を飲む儀式について『延喜式』の記述を確認しておこう。卷三七典藥寮「元日御藥」に、必要な物(①②③④)と手順が記されている(へ)は割注。

寮官人等、持^①藥共入、進置。即用^②銀鎗子、煖^③酒、漬^④屠蘇(造酒、供^⑤酒。主殿、設^⑥火爐)。尚^⑦藥執^⑧御盞、率^⑨

女孺昇殿、令^⑩藥司童女先嘗、然後供御。

①藥(酒と屠蘇)を②鎗子に入れ、③火爐で温めて、④御盞に注ぐ。この儀式の必須構成物を続古事談第五話の文章と対応させると、「油漏器」、(大嘗会の火おけ)、「くすり①」、「(藥を温める)たたら③」、「(銀の)てうし「銚子」②」となり、焼失物としてもっとも重要で最初に言及されている「油漏器」とは、帝が実際に手を触れる「藥を飲むための器④盞」と考えるのが自然だと思われるのである。

○賀陽親王 かやしんのう(七九四〜八七二)。桓武天皇の第七皇子。元和本和名抄「賀陽加也」(八卷・但馬国気多郡)と訓がある。今昔物語集(卷二四の二)に「極タル物ノ上手ノ細工」として作った物が奇跡を起こした話が載る。

○うつしつくり 実物の形にまねて作る。色「模ウツス摺影写(中略)已上同」(ウ辞字、黒川本)、大鏡・五・道長上「天竺の祇園精舎を唐の西明寺にうつしつくり、唐の西明寺の一院を、此国のみかどは、大安寺にうつさしめ給へるなり」、打聞集・八「此仏ヲバ唐ニ渡タテマツレルヲ、又ウツシ造タテマツリテ、此国ニ渡シタテマツルナリ」。法苑珠林(六六八年)に「模造普賢、來儀盛像」(卷十七・敬仏編第六之五・普賢驗)とあり、文脈的にも漢語「模造」の訓読による複合動詞の可能性がある。

○切用 「功用」の誤写だろう。原文は「切」の異体字で偏が「十」の形。13話に「功德」があり、偏は「亅」形で縦棒は突き出ない。「切用」という漢語は近世にはある。中世に見られる「切用」の文字列は対象が紙、竹、木などで「キリモチイル」と訓読できるもの。「功用」は日国に「ものの役にたつこと。また、そのはたらき。ききめ。効能。機能。」とあり、続古事談のこの例が古いものとして挙げられているが、十一世紀後半成立と言われる『香字抄』には「桂心香 本草云。天神桂。味温無毒〔中略〕功用似桂皮。」（早大古典籍総合データベース〈ヲ0900011〉上巻75/81、貞応元年（一二二二）一二月慈円願文「十八年勤行之功用不空」（伏見宮御記録）利七十二、鎌倉遺文による）といった例もあるので存在は認められるだろう。荀子・非十二子「上_レ功用、大_レ儉約」とある漢語で、功は呉音ク・クウ、漢音コウ、用は呉音ユウ、漢音ヨウ。語形は、米沢本沙石集（室町末期く江戸初期写）に「末代ナレバトテモ、ガラニノ功用〔クヨウ〕失ヌニコソ」（九・一八）とあるのが参考になる。呉音十漢音の形だが、「用」は源氏物語・桐壺「かの御かたみにとて、かかる_レもやと残し給へりける御装束」や『観』『用 禾ユウ又ヨウ』（仏中一三六）といった例から「用」としての浸透が早かったことが窺われる。一方で、字類抄には漢音の「功」から始まる語は無く、呉音は「功德」「功過クウクワ」「功程

クチャウ」「功勞クラウ」「功能」「功カクリキ」（ク疊字、黒川本）があるので、「功用」の読みはクヨウでいいのではないか。日ボは「_oyo」。ちなみに米沢本沙石集写本（二く二巻）には「妙用（メウヨウ）」「応用（ヨウエウ／ヨウヨウ）」「徳用（トクヨウ）」「用途（ヨウト）」「用心（ヨウシン）」「用意（ヨウイ）」「外用（ゲヨウ）」「体用（タイヨウ）」といったフリガナが見られ、沙石集注釈書類で一般的に、呉音「用」の形は拾えない。

○ほとこす 人々の前にあらわし示す。公衆に示す意。大唐西域記「遠近に宣_ト示_ス、咸（く）に聞知ラ使（む）」（四・薩陀泥濕代羅国、長寛元年点（一一六三））。

○大嘗会 だいじゃうゑ。宇津保物語・忠こそ「この帯をさす事、大じゃうゑ、今年の内宴になんさしつる」。

○火おけ 歴史的仮名遣い「をけ」。枕草子・一「火おけの火も白き灰がちになりて」、色「桶オケ」（才雑物、黒川本）。二巻本「桶ヲケ」（才雑物）。定家かなづかいのヲとオの区別は、アクセントの高低（ヲ上声、オ平声）であり、先行する色葉字類抄も同様である（大野晋「仮名遣の起源について」『国語と国文学』一九五〇年一二月、こまつひでお「三巻本『色葉字類抄』における「ヲ」「オ」の分布とその分析」『国語学』六九、一九六七）。

○元三の御くすり 十巻本に「（元）三」（ク疊字）とある。訓は

無い。「元」は呉音グワン、漢音グエン。**色**なし。正宗文庫本節用集「元三グワンザン」(ク時節)、日ボ「Cuanzan」。元日、天皇のお屠蘇の毒味をする役目の少女のことを「くわんざんのくすりこ」という。枕草子・一四九「えせものの所得るをり(略)元三のくすりこ、卯杖の法師」。なお、「三」の漢字音はm韻尾だが、院政期からn韻尾との混同表記が見られる(小林芳規「和化漢文における口頭語資料の認定」『鎌倉時代語研究一二輯』一九八九など参照)。

○あたたむる **色**「煖 アタタム」(ア辞字)、観智院本名義抄は「温」「霽」など四種類。新撰字鏡「煖 阿太々牟」、今昔「六日方間温メテ命ヲ助ケキ」(巻二の五、鈴鹿本)。

○たたら **色**「踏輪 タタラ 鍛冶具也 鎗 同 鑪 同」(タ雑物、黒川本)。正宗文庫本節用集「鑪タタラ」(タ天地)。足で踏んで風を送る大型の輪。ここでは扶桑略記に「煎 御葉^{みは}火爐、共為灰爐。」とあるように、フイゴを使って温める場所**色**「火爐ヒタキ」ヒ雑物)だろう。

○なんと 日国補注「土左・承平四年二月二十七日」の「これかれ酒なにともて追ひ来て」に見られる「なにと」を語源とするのが妥当であろう。nanito → nando → nado と変化したと考えられ、むしろ「なんど」は「など」の原型と考えられる。撥音表記の固

定していなかった中古に「など」と表記されたものは「なんど」の発音であった可能性もある。」

○世のはじまり 大鏡「世のはじまりは、人の寿は八万歳なり」(人・道長)、栄花物語「わが(道長ノ)御世の始めより、法華經の不断経を読ませたまひ」(巻一五うたがひ)。

○くすり殿 「葉殿」は内裏の安福殿にあつて、侍医や薬生が伺候する所(拾芥抄・中・宮城部)。延喜式などの漢字表記例「葉殿」は「くすどの」と一般的に読まれるが、仮名書きの古い例は未見。

日国の「くすりどの」は続古事談のこの例のみ。諸本で異同は無い。字類抄ク篇には「葉」から始まる単語が無く、十巻本でも「葉司クスリノツカサ」(ク官職)のみ。クスリは単独で使われ(万葉集・五・八四七「我が盛りいたく衰々ぬ雲に飛ぶ久須利はむともまた変若めやも」、複合語前項の例には次のようなものがある。

・仏足石歌(七五三頃)「久須理師は常のもあれど賓客の今の薬師貴かりけり賞だしかりけり」

・貫之集・巻四「郭公鳴くとも知らずあやめ草こぞくすりひのしるしなりけり」(※葉日=陰曆五月五日)

・塵袋・一「蘭湯ト云フハクスリ湯力、潔斎力」

一方、「クス」は複合語の前項にしか現れない形式である。

・土左日記・承平四年二月二十九日「くすりふりはへて、屠蘇、

白散、酒くはへて持て来たり」

・蜻蛉日記・天延二年五月「天下の本草と取り集めて『めづらかなるくすだませむ』とて」

・法華経音訓（一三八六）「葉クスリクス」〔序品〕

クスリシ↓クスシの変化が早く起こったため「クス」を前項に持つ複合語がいくつか生産されたが、主流は古代から現代まで「クスリ+」であり、本書の「くすり殿」は珍しい語形ではないと考えられる。

○てうし 〔色〕「銚子テウシ」（テ雑物）

○やふれ損し 〔色〕「壊ヤフル傷地稀割破（以下三九字略）已上壊」（ヤ辞字、黒川本）、ヤブル（下二段）は、現代語と同じ「紙が裂ける」「戦いに負ける」の用例も中古からあるが、ここは「壊れる」意。平家物語・灌頂・大原入「薨やぶれては霧不斷の香をたき」。「損ず」は〔色〕「損ソコナフ又ソンス」（ソ辞字、黒川本）とあり、韻尾ⁿでソンスと連濁する。日ボ「魚ガ^ソソ^ソじ^ソた」¹⁰²話にも「やぶれ損じて」があり、114話に「あへて破損なし」がある。「破損」の訓読か。延喜式「随破損申^レ省請替」（典葉寮・寮家儲物）、今昔物語集「其ノ寺、年久ク成テ破レ損ジテ」（巻一七の五、鈴鹿本）、十卷本「破損」（ハ疊字）。漢語「破損」は、『三国志』（魏志・公孫淵伝の「悉斬送彌婁等首」）に付けられた裴松之（三三七）

四五二）の注に引用されている魚寮の『魏略』文中にある。「流離死亡千有余人、滅絶不反。此誠、暴猾賊之鋒、摧矜誇之巧、昭示天下、破損^ギ其業」。

○雅忠 丹波雅忠（一〇二一〜一〇八八）。『医心方』を抄録した『医略抄』のほか、『医心方拾遺』などの著がある。典葉頭は典葉寮の長官で一一世紀以後、和氣・丹波両家の世襲。

○典葉頭 宇津保「てんやくのかみに問ひ給へば」（国譲中）、十卷本字類抄はテ篇の官職門に「典葉寮」〔頭一人從五位下大医監〕「助一人從六位上（大医）正」〔允一人（後略）〕とある。

○銀 〔色〕「銀^ギ」〔上声俗シロカネ〕（シ雑物）のようにシ篇に収められているが、漢字「銀」に濁声点が二か所（平声と上声）付されており、これは右傍にある字音の場合のものと考えられる。和名抄・三「銀爾雅云白金曰銀（亘珍反）其美者曰鏹（力凋力弔二反之路加彌）」、源氏物語・胡蝶「しろかねの花がめに桜をさし」、日ボ「X^ろrocan^え」。

○（新しき銀）の（ふるきにまぜて）諸本「銀ヲ」で異同は無い。「の」の字母は「能」で、誤写とするなら親本のヲは「越」。原文通り「の」で解釈するならば、「銀」を（シロカネではなく）ギンと読んで ^{gin-wo} という音連続となったものが連声し、^{ginno} という発音のままに書写者が書いてしまったということが一応考えら

れる。高山寺古往来「着摺衣男、不知^レ姓名」(消息一〇・高山寺本古往来表白集) 東京大学出版会一九七二、毛詩抄「昏姻ノ嫁娶ノ礼儀ナドガ、スベイ時分ニセヌゾ。〈中略〉季秋カラ明ル年ノ孟春ヲ尽スマデ、昏姻ノスルト心得タゾ。〈中略〉此外ハ餘月ニ婚ヲバナサヌゾ。」(巻六・綱繆) といった例もある。また一方でF本は近世の写本であるから、教養の誇示として「しろかねヲまぜて」を「しろかねノまぜて」にするという「連声モドキ」という概念もある(遠藤邦基「連声の増価意識―誤った類推形の成立をめぐる―」『国語国文』五四の七、一九八五)。が、これはF本文全体(少なくともこの書写者担当部分)の異同確認が済んだからの検討事項である。

○ふるき [色]「旧フルシ古故〈中略〉已上同」(フ辞字、黒川本)
○ませて [色]「交マシハル苗間接雑(以下三九字略) 已上同」(マ辞字、黒川本)。二巻本、十巻本も同様で「マズ」は無い。観「混ヒタタケテムラカル(他略)」(法上四三)。築島(一九六三、六一六頁)に「和文では「マズ」「カハス」「マジル」「マジラフ」を用ゐて〈中略〉逆に訓読では「マジフ」「マジハル」を用ゐて」とあり、マズの訓点の例として法華義疏「正法を説て不^レ雜^ズ「非法」が故」(序品末、一〇〇二年点||中田一九五八による)を挙げる。
○うしかへて ちがうものにとりかえる。今鏡・五・みかさの松

「このおとど、花園のおとど二人、若き大臣のよく仕へぬべきをうちかへつつ、公事もつとめさせで」、沙石集「俗は信じて多く施せよ。僧は節して少なく取れ」と。今の世には、うちかへてこそ。されば俗の心も僧の心も律令にも背き仏法にも合はずこそ覺ゆれ」(巻十の一二)。色「替カフカハル〈中略〉貸代易買交更(以下二字略)已上替」(力辞字、黒川本)。

○供御 [色]「供御クコ」(ク疊字、黒川本)、明応五年本節用集「供御グゴ」(ク食物)、日ボ「Gugo」。

○典藥寮 [色]「典藥寮テンヤクレウ」(テ官職)

○明堂図 呉音でミヤウダウツ。中国医学で、経穴や経絡を示した人体図。八一五年の『新撰姓氏録』に「内外典、藥書、明堂図等百六十四卷」(左京諸蕃・下・和薬使主)とある。128話「忠康申さく」内腿、外腿、異なり。医書・明堂図に見えたり」。

○靈物 [観]「靈禾リヤウ」(法下六六)、「物禾モチ」(仏下末六)。呉音なら「リヤウモツ」、漢音なら「レイブツ」だが、日国の見出しは「れいもつ」。用例は全て漢字なので、根拠は分らない。「れいぶつ」も立項するが、用例は全て明治以降のもの。字類抄は「靈レイ 神也聖也」(レ人倫。黒川本)、「靈驗」「靈異」「靈童」「靈底」「靈粹」(レ疊字、黒川本)とあって、呉音よみは「靈驗リヤウゲム」(リ疊字)のみ。「物」で終わる漢語は「調物テウモツ」(禄物口

クモツ」等、ブツで終わる漢語は「宝物ホウフツ」「珍物チンブツ」等、二通り示すものに「逸物イチブツ人也、イチモツ馬也」がある（いずれも前田本）。十巻本はレ疊字に「靈」字から始まる単語が「靈鬼」「靈験」など二十三語掲載されているが、「靈物」は無い（リ篇疊字には一語もない）。『後漢書』に用例があり（「今天下清寧、靈物仍降」光武紀下）、国内の例は平安時代初期から。三教指帰（七九七年）に「神丹練丹、葉中靈物」（中）とあり、旧大系は「神妙なものと」注して「れいぶつ」とフリガナを振っている。古事談の「靈物忽抱法皇御腰、半死御坐」（七話）は源融の惡靈そのものを指すが、呉音よみの単独の「靈（りやう）」が惡靈を意味する（8話注釈参照）とすると、この例については「靈物」と読む方向も考えてみていいと思う。

○本寮 本部の寮舎。正法眼蔵・安居「衆寮の僧衆、すなはち本寮につきて煎点調經す」（思想大系・下、二六六頁）

○すてをきて 歴史的仮名遣い「すておく」。今昔「父ヲ棄置テ家ニ返ヌ」（巻九の四五、鈴鹿本）

○累代の宝物 色「累代 ルイタイ」（ル疊字）、「寶物 ホウフツ」（ホ疊字）。「代」は呉音タイ、漢音タイ。宇津保物語・忠こそ「るいたひに伝はれる帯なり」、文明本節用集「累代 ルイタイ」（ル態芸）、日葡辞書「ruia」。すなわち、ダイタイ（訳）重なつた時代、

つまり、あまたの時代」。「宝物」は第2話に「たから物」とあるので訓読みとする。

【翻刻】

(7) 堀川院、皇子*遅く*出てき*給ければ、白河院敷き*給て、鳥羽院の御母后*は入内*ありけり。孕み*給て後、かの御母坊門尼上*、賀茂に籠り*て男子*を祈ける夢に、大明神*衣*の袖*に居させ給て、もの仰せられ*けり。「又*男子をうむへし」又*「その間木*なる物をとれ」と見て、おとろきて、間木*を搜り*たるに、作りたる龍*ありけり。それととりて、つたはりて*鳥羽院に奉られにけり。かの大男神、居給たりける衣*をは、御正体*とて、四条坊門の別宮*をは、かの尼上*つくれるなり。女御*孕み給ける時、女一人参て女房*に申ていはく、「この孕み給へるは王子*也。めでたくおはしますへし。右の御扉*に疵*おはしますへし」と云ければ、女房、東宮太夫*に*実に告げ申たりければ、出て会はむ*とせられるほに、いつちともなく失せにけり。生給てまことに右の御扉に疵おはしましけり。

【注釈】

○皇子 観 「皇子 ミコ」(法下一三七)、「親王 ミコ」(法中一二)。「皇」は漢音クワウ、呉音ワウ。字類抄三卷本、二卷本、十卷本ともワ・ク・ミ篇に「皇子」「皇女」という見出しは無い。「皇」は韻32転喉音全濁一等^{auan}。「子」の頭子音は清音sで、鼻音韻尾に付いて「ワウジ」となる。経亮本節用集「皇子 ワウジ」(ワ人倫)、運歩色葉集「王子 ワウジ」(元龜二年京大本)。「みこ」は男子にも女子にも使う。日国「みこ」補注「御子」という表記は親王・皇子以外の高貴な子女に關しても用いられるが、平安時代の仮名文学では「おおんこ」と読みならわされている。古今集・春上・二一・詞書「仁和のみかど、みこにおましましたる時に、榮花物語・月の宴「そのみかどのみこたちあまたおはしましたるなかに」とあるように天皇の子供が「ミコ」。柳原邦彦「源氏物語の「みこ」と「御こ」と」(『平安語彙論考』教育出版センター、一九八二、初出一九七三)。

○をそく 歴史的仮名遣い「おそし」。^色「遅ヲソシ後晚徐漸(以下八字略)已上同」(ヲ辞字)。「皇子おそく出でく」で「結婚して一定の時間が経っても皇子が生まれ出てこない」の意味。岡崎正継「御導師遅く参りければ」の解釈をめぐって『今泉博士古稀記念国語学論叢』(桜楓社、一九七三)、後藤英次「平安時代

古記録における「遅参」とその関連語の解釈をめぐって」『中京大文学会論叢』五、二〇一九。

○いてき 「出で来^く」。堤中納言物語・このついで「いとつくしきちごさへいできにければ」、徒然草・一九〇「子などいできて、かしづき愛したる、心うし」。平家「中宮は廿二にならせ給ふ。しかれどもいまだ皇子も姫宮もいできさせ給はず」(三・赦文)は上二段化した例。長門本平家の該当箇所は「皇子もいまたわたらせおはします」(五・建礼門院御懷妊事)でここにイデクは無し。源氏物語・桐壺「世になく清らなるたまのをのこ御子さへうまれ給ひぬ」との意味差はあるか。

○なけき ^色「歎ナケク嗟嘆(以下一七字略)已上同」(ナ人事、黒川本)。二巻本には「歎嗟嘆……」とあり、黒川本3字目は誤字。

○母后 先帝の皇后であり、現在の天子の母。今昔「母ノ后キニ向テ云ク『生ル者ハ必ズ滅ス(中略)』ト。母后、此事ヲ聞テ涕泣シテ答ル事无シ」(巻二の四、鈴鹿本)、大唐西域記長寛元年点(一一六三)三「正后(ハハキサキ)ハ終没^{ウセタマヒヌ}」、源氏物語・桐壺「はは后、世になくかしづききこえ給ふを」(源氏物語大成 池田本)、日ボ「Booハワギミ(訳)国王の夫人で、子どものある人」。

○入内 呉音なら「ニフ・ナイ」、漢音なら「ジフ・ダイ」。ジュは慣用音(漢音からの変化だろう)。日本紀略「今夜、中宮入内」

(長徳元年〔九九五年〕六月一日) など漢字で出てくるが、語形の確定できる資料は多くない。観「入イルハムシム禾二フ、一(入)ヒトシホ、(入)内ウチヘマイル、(入)車クルマニノス」(僧下一〇九)。色葉字類抄のシ疊字から「入」字の熟語を探すと、入声の位置に濁声点が付いて、「入夢ジウム」「入木ジウボク」(黒川本「シユホク」)があり、訓も声点もないものに「入眼」「入郷」があるが、以上四語は二巻本には無い。シ員数に「入シウ」がある。この時期、「ジウダイ」か。十巻本のシ疊字には「入境」「(入)韻」「(入)住」「(入)京ケイ」「(入)洛」「(入)魔」「(入)仕」の六語。入洛は文明本節用集「道鏡太政大臣(略)後入洛(ジュラク)而号弓削法皇(タ人名)とあり、「入眼」は御湯殿上日記・明応二年(一四九三)三月二五日「しゆかんこよひあり。こをりかみあそはしてふ行にてつかはさるる」、春林本下学集に「入眼ジUGAN」(言辭門)とあって、一五世紀には慣用音化していたとみてよさそうだが、これがどこまで遡るか。妙法寺蔵『いろは字』(二五五九写)に「入院(ジュエン)、(入)眼(ガン)、(入)内(ダイ)、(入)魂(シユツコン)」とある。峰岸『集成』下巻の「記録語解義」で入眼、入寺、入室、入内が取り上げられている。「読み」という項目があり、「入眼」の場合は右の下学集や節用集などの中世辞書の和訓が並ぶが、「入内」には『大鏡』の一例があるので、

しかも漢字書き(京大ウェブサイトで近衛本の当該箇所(地image27左24)を確認した)ということと語形情報は得られない。この同じ「太政大臣頼忠」の「入内」を他本で見ると、蓬左本では「はじめて内へまゐりたまふ」となっていて、仮名だが「入内」が無い。異同が多いのか、金刀比羅本『保元物語』『軍兵その数をしらず入洛(ジュラク)して』(上・官軍方々手分けの事)の例は、半井本には無し。

○はらみ 色「娠ハラム孕妊(以下八字略)已上同」(八人事)。今昔は「孕」五例、「懷」二例。

○坊門尼上 ばうもんあまうへ。色「坊門ハウモン俗」(八地儀)。「坊」字には平声点と去声複声点とが差されている。ちなみに平安京では朱雀大路に面して、三条以下九条までの各坊ごとに東西一四門が設けられていた。名語記・三「はうは房也。坊も同じ。かならず僧房のみに非ず。大内にもいづくの房とて、これあり。九重に坊門といへる、その義也」。「尼上」は源氏物語・手習「あまうへ、疾う帰らせ給はなん」とある。

○こもり 色「仄コムコモル(中略)籠(ハ合点あり。以下略)」(コ辞字)

○男子 色「男子 ヲノコ(ヲ人倫)。私聚百因縁集・六・一九「唯男子(ナンシ)一人アリ、僕子ト云、運歩色葉集「男子ナン

シ、日ボ「Namsi」。「男」は韻39転舌音清濁一等namで鼻音韻尾だが「子(シ)」が連濁しない。「をのこ」日国語誌「(1)男女の区別を示す」「を」「め」の対立を語基に、「めのこ」と対をなす語本来、人(または成人)の男性を指す語で、「をんな」と対に用いられることもあったが、「こ」の意識の変化から、平安時代には、「むすめ」と対になる例があり、男性の子供(息子)の意や、年齢的に若い男性(男の子)の意でも用いられた。(2)注目すべきは〈中略〉宮中(殿上)や貴人に仕える男性を指すのに用いられたことで、この用法も含めて広く、世代的身分的に下の存在の男性と認識されたところが、類義語「おとこ(をとこ)」との違いであつたとみられる。」とあり、ここは皇子なのでヲノコではなくナンシと考えておく。

○折ける 色「祈イノル禱願咒(以下六字略)已上同(イ辞字)。「男子を祈る」の形は、現代語ならば「男子の出生を祈る」としなければ違和感のあるところ。『台記』には「祈生男於賀茂」(康治元年五月一六日)とあつて「生」が入っている。続古事談の和文的(あいまいな)表現部分なのかもしれない。大鏡・二・頼忠「ひめぎみの御息災をいのり給ふ」、古今集・仮名序「あふさか山にいたりてたむけをいのり」。日国「いのる」語誌「(1)元來、言靈信仰に連なる一種の畏怖感、呪性に基づいて、その神の名や

呪言をとなえて幸福を求める意であつたから、古くは「神をいのる」の形であつたが、現在は「神にいのる」という。(2)「のる」との派生関係についての確証はないが、(1)の挙例「万葉集」の「神を祈る」といった表現から、「神の名を口にする」ことが本来の意義であつたと考えられる。その後、平安時代には、「神に」という形で用いられ、願い事の成就を神に「対して」要求する意味を表わすようになる。」

○大明神 だい・みやうじん。神の尊称「明神」をさらに高めた語。

日本三代実録「祈止雨」、告文曰「天皇が詔旨と掛畏き松尾

大明神の広前(に)申賜へと申」(仁和二年(八八六)八月七日)。

○きぬ 色「衣キヌ 服同(キ雑物)。日国語誌「上代では日常の普段着。旅行着や外出着は「ころも」といった。そのため「きぬ」は歌ことばとはならなかった(中略)院政期以降は衣服の総称でなくなり、「絹」の意の例が見えはじめ、軍記物語では上層階級や女性の着衣の意味で用いられている。語源上は、材質の「絹」とかわるか。下層階級の衣服は「いしやう」であつた。」

○そて 色「袖ソテ(以下七字略)已上衣袖也」(ソ雑物、黒川本) ○おほせられ 色「仰オミス課科」「被オホス戻同」(オ辞字、黒川本。二巻本も同様)。言葉を「負ほす」ことから命令する意味になり、「言ふ」の尊敬語になったという。ラルが付いた形で尊敬

になるものは平安中期から。中西宇一「言う」「聞く」に関する敬語―親・疎の対立―『女子大国文』六六、一九七二。

○又「又男子をうむ」とは、鳥羽院の御母后（藤原苺子）が入内後に妊娠したのが流産したことを踏まえて暗示しているという（新大系六〇九頁注）。

○又 注釈書はいずれも「又男子をうむべし。又その間木なる物をとれ」をひとつながりと見ているが、その場合、この後の方の「また」の意味が分からない。ここは「又」を地の文とし、「男子を産むだろう」という予告を受け、さらに（それだけでなく）「間木にあるものを取れ」という男児出産につながる行動指示があった、という文の構成を提案したい。

○まき 今昔「（食べ残しを）前ナル間木ニ指上テ置テケリ」（一九の二二、実践女子大本）、名語記・五「障子、遣戸のかも井のうへを、まきとなづくる、如何。答、まきは間木也。この柱より、かの柱までわたせる木なれば、まき也」。

○見て 前文の「夢に」を受ける。お告げを夢に見て、目を覚ます（おとろく）。

○おとろきて 日国語誌「（一）上代から生理的覚醒（目覚める）と心理的覚醒（びつくりする）とを意味したが、中古では、意外な事実遭遇して平静さを失うとか、事態を急に悟るといった心

理的意味での用法が目立つ。（2）平安中期以降（中略）「驚くままだに目悟めぬ」（中略）「目悟めて驚たりける」などから双方の意味に分化の傾向が見られ、次第に「目覚める」意は用いられなくなった。」

○さくり 色「探サグル搜（以下三字略）已上同」（サ辞字）。今昔はほとんど「搜」字。

○龍 色「龍リウリヨウ」（リ動物）、「龍タツ」（タ動物、黒川本）。

観「龍タツネリウ」（僧下七四）

○つたはりて 直前の「（尼上ガ龍ヲ）とりて」と繋がらないが、後の「奉られ（受身）」と主語は同じ（龍）になる。出典の台記には鳥羽院の回想として「其龍、伝在朕許」とあるので、台記の「伝」は訓読すれば「伝わりて」となる。十六夜日記「和徳門院の新中納言の君と聞こゆるは、（中略）前の齋宮と聞こえしに父の中納言の参らせおき給へりけるままにて、年経給ひにける。この女院は齋宮の御子（＝養子ノコト）にし奉り給へりしかば、つたはりて候ひ給ふなりけり。」は、齋宮から和徳門院に継続して、そのまま、の意。「つたはる」を動詞として読めば「新中納言の君方、齋宮カラ和徳門院ニ、伝わつてお仕えする」となり、やはりその文の主語や他の述語との折り合いが悪い。わかりにくい主語が転換している、と考えるよりは、キワメテ、サダメテのようにテ

形の副訶化と考えてはどうか。十訓抄「慈恵と寛朝は」少しも本尊にかはらざるなり。《中略》両僧つたはりて、この御時の人なりければ、帝も『われ、人を得たること、延喜、天曆にも』と御自讃ありける。」は「生きながらえて」くらいの意。十六夜日記の例と接点がある。

○御正体 シャウダイ。神体。多く、上に「御」をつけていう。左経記・長元四年（二〇三二）一〇月一七日「安置七宝宮於宝殿中、是称御正体」、平家物語・一一・鶏合壇浦合戦「若王子の御正体を舟にのせまいらせ」（高野本写本）、日ボ「Xōdai 例、Voxōdai、または、Mixōdai」。「正」の字音は鼻音韻尾^リなので連濁する。

○別宮 日国は見出しを「ベツグウ」とするが、舌内入声^トの後で濁音化する理由はないので「ベツクウ」か。百練抄・天承元年（一一三二）一〇月二八日「祇園別宮^少将井炎上」、頭引付・応永一五年（一四〇八）十一月一日（古事類苑・神祇五二）「ぎうないくうべつくう、せんしやまつしや御くらの注文の事」。漢辞海は呉音ク・クウ・グウとする。古語大鑑は「サイグウ（斎宮）」項目の補説で「宮」字は《中略》呉音「ク・クウ」（名義抄に呉音の別称「和音」として「クウ」と掲出する）《中略》「サイクウ」と「ク」は清音であるはずである。「神宮」「東宮」など、上字が鼻音韻尾で終わるために連濁を起こしている語例からの類推で、

いつの頃からか「サイグウ」と連濁するようになったものであろう。引例に運歩色葉を上げたが、濁音に読んだ徴証は無く、他の古辞書などにも清濁を決すべき確証は見当たらない。」とする。日ボには別教 Begeo、別業 Begano の例があり、Bechi、以外の「別」は全て基本的に「Bei」の形であること、後続する軟口蓋破裂音は連濁せず、^トの方が逆行同化する、ということが知れる。

○女御 岩波古語補訂版に「源氏物語や枕草子の古写本には「女御」とあつて仮名書はなく、院政時代の前田本色葉字類抄に「女御ニヨゴ、后妃部」とあるから、当時はニヨゴと呼んだのであろう。しかし、文明本節用集など室町時代の辞書にはニヨウゴとあり、江戸時代書写の黒川本色葉字類抄の書入れには「私曰、ニヤウト引名目遣也」とあるから、室町時代以後ニヨウゴに転じたものと思われる。これはニヨゴがもともと nyōgo と発音されたので、その go の n が独立して、nyōngo → nyoungo となったものであろう。」とある。

○女房 明応本節用集「女房ニヨバウ」（二・人物）、ごばん忠信（一六七六年）三「りきじゅと申によばうはすねん契りをこめたれとも」、日ボ「Nōbo（訳）女」、とりかへばや物語・中「にうばう」などにも、四五人よりほかはみえ侍らねば、今鏡・七・新枕「御母、加賀兵衛とかいひしが妹にて、下らうねうばうにおはせし

かど。高松政雄「才段拗長音の一問題」『国語学』八三、一九七〇。

【参考】類例に「所得」の語形がある。古本説話集・五八「この布をひとむら取らせたれば、男おもはずなるせうとくしたりと思ひて、宇治拾遺物語・三八「家の焼くるを見て、打うなづきて、時々笑ひけり。あはれ、為つるせうとく哉」。日国語誌・「所」字には「せう」の音がないところから、「抄徳（せうとく）」（うまいことをする）の意」と解する説もある。しかし、その意味・用法は当時の「所得」に類似しており、「女（にょ）」を「によう」と発音し、院政時代には「女房」を「ねうぼう」とも表記したように、「所」を「しよう」と発音し、「所得（しようとく）」を「せうとく」と表記したものと考えられる。ただし、「色葉字類抄」をはじめ、当時の古辞書で「所得」は「シヨトク」であり、「シヨウトク」あるいは「セウトク」とする例は見えない。」

○王子 日国は「帝王の男の子。天皇・皇帝の子には『皇子』を、王の子には『王子』をあてるのが普通。」として、凌雲集・秋夜途中聞笙（菅原清公）「王子偶仙何处在、洛浜遣態使人驚」、知恩院本「上宮聖徳法王帝説」「坐於伊加留加宮山代大兄及其昆弟等合十五王子等」の例を挙げる。

○御扉 「扉（草体）は「尻」の誤写と思われる。台記「右尻有疵」。

○あさ 色「疵アザ」（ア人体）。「疵」の字義は「すりきず」。現

在一般に使う「瘰」字は書言字考節用集、へボン初版に見える。

○東宮太夫 春宮坊の長官。枕草子・一六三・上達部は「上達部は左大将。右大将。春宮大夫」、日国「だいぶ」は「たいふ」の変化した語）令制官司の大膳職、左右京職、修理職、中宮職および春宮坊の長官をいう場合のよみぐせ。」とする。色「伯カミ用神祇官（中略）大夫、同用京職并東宮坊（力官職）、文明本節用集「中宮職是同妻后也大夫（ダイブ）一人相当從四位下」（次官位）。日国「たいふ」語誌「日本における「大夫」には官職を意味する場合と、位階をさす場合とがある。前者は職の長官の場合で「だいぶ」と読みならわしている（「だいぶ」は別項）。八省の次官の大輔（たいふ）と区別するためといわれる。後者は、一位から五位に通ずる尊称ともされるが、三位以上が卿と称されるのに対して、四位・五位をさすことが多くなり、大夫が本来、尊称であるところから、五位の場合はとくに多用され、五位の別称ともなった。五位は貴族の最下級であったが、門地のない地方の武士などにとっては、これに叙爵し、大夫を称することが栄光を意味した。遊芸人、神職、遊女の主なる者が大夫を称するものもこれに類した事情からであったと考えられる。なお、位階の場合の仮名表記は「たいふ」で、現代の発音では「たゆう」となる。」語形変化とその時期については五島和代「イウからユウ（ユー）へ」『国

語学』五一の三(二〇〇〇)。

○(東宮太夫)に実(じつ)に(つけ) 他本「公実」。「に」は「公」の草書体を誤読したものと思われる。が、「実(じつ)に」という副詞は鎌倉時代に例があるので、このまま解釈可能。正法眼蔵・心不可得「婆子そのとき徳山を杜口せしむとも、実(じつ)にその人なること、いまださだめがたし」。去来抄・同門評「てやの一字千金。半残は実(じつ)に手だれ也」。

○いてあはむ 対面する、面会する。今昔に「出(い)で」が一〇例、「出合」一例。今昔「家主ノ女房ナド出(い)で物語ナドシテ」(巻一七の三三三、鈴鹿本)、日ボ「キャクジンニ ideyo」。

○いつちともなく 日国補注「上代には『いづく』が不定の場所、『いつち』が不定の方向という使い分けがなされていた」。源氏・若紫「御車に奉るほど、大殿より、『いつちともなくておはしましにけること』と、忠度集(一一八二頃)「身の程は思ひあまれる景色にていつちともなく行く蛩哉」。「いづくともなく」は更級日記や栄花物語に例があるが、いずれも「どこということもなく」という意味で、「ドコヘ」という方向性は持たない。近世では、黄表紙の『江戸春一夜千両』下「五十両渡しければ、ひつたくつて、いづくともなく逃げ失せける」(一七八六年)、仮名手本忠臣蔵・十「懷までをひつさらへ いづくともなく逃げ行きし」(一七四八

年)とイツク系になる。

(つづ)

参考文献

- 鈴木慎吾「Web韻圖」 <http://suzukish.s252.xrea.com/search/inkyō/index.php>
- 山崎誠「西尾市立図書館岩瀬文庫所蔵『言談抄』について」『広島女子大国文』二号、一九八五(西尾市岩瀬文庫／古典籍書誌データベースに翻刻の正誤表あり)
- 田島公「早稲田大学図書館蔵『先秘言談抄』の書誌と翻刻―三條西家旧蔵本『言談抄』の紹介―」『禁裏・公家文庫研究 第四輯』思文閣出版、二〇一二年
- 佐藤喜代治『色葉字類抄(巻上) 略注』『同(巻中)』『同(巻下)』明治書院一九九五『略注』
- 虎尾俊哉編『訳注日本史料 延喜式』集英社、上巻二〇〇〇年、中巻二〇〇七年、下巻二〇一七年
- 築島裕『平安時代の漢文訓読語につきての研究』東京大学出版会、一九六三年
- 中田祝夫『古点本の国語学的研究 訳文篇』講談社、一九五八年(本学教授)